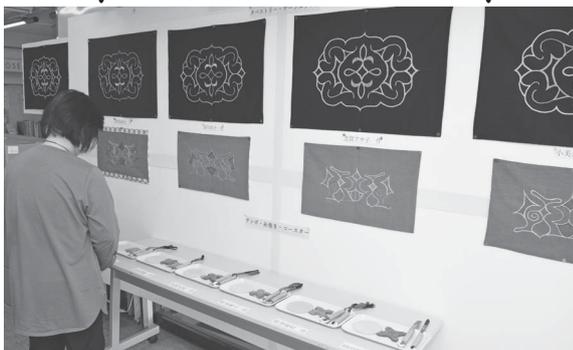


白老アイヌ協会人材育成講座



地域アイヌ文化を次代に継承するための初事業。講座を受講した町民、同協会会員ら15人が、会員の指導の下、タペストリーや木彫の針入れなどを熱心に作りました。（同協会人材育成・商品開発拠点）

アイヌ伝統工芸サークル「テケカラペ」 白老民族芸能保存会



イオル事務所チキサニでは、町内の四つのアイヌ文化サークルの皆さんの作品を順次紹介しています。今回は同保存会との同時展示で、エプロンやトートバッグ、鉢巻き、手甲など両団体合わせて約70点が並び、色彩豊かなアイヌ文様が来所者を感心させていました。（同事務所）

アイヌ伝統工芸作品 展示会にぎやかに



町内では2月末から3月にかけて、教室・講座などで町民らが手作りした刺しゅうや木彫など、アイヌ伝統工芸品の展示会が開催され、丹念に仕上げられた力作が来場した町民の目を楽しませました。

町アイヌ文化手工芸担い手養成講座



「白老の新たなお土産作り」をコンセプトにした試作品販売会が開かれました。これまでに町主催のアイヌ文化を取り入れた手工芸品作りの担い手養成講座を修了した町民の中から、希望者12人が参加しました。販売は盛況で、町はそれぞれが個人作家として活躍できるようサポート事業にも取り組んでいます。（駅北観光インフォメーションセンター）

知っておこう アイヌ文化

モセ

イランカラッテ。山々を覆っていた雪が解け、少しずつ春の気配を感じられるようになりました。森野地区でも雪解けが進み、さまざまな植物の新芽が顔を出している一方で、立ち枯れた植物の中にエゾイラクサを見つけました。それはよく、「かゆかゆ草（かいかい草）」などと呼ばれ、主に若葉の頃、茎や葉の刺毛に触れるとチクチク痛がゆいので嫌われることがしばしばです。しかし、アイヌ民族はイラクサをモセと呼び、新芽のうちに葉を採って汁物の具にするなど、食用にしたほか、枯れ茎から繊維を取り出して糸にし、さまざまな生活用具を作りました。例えば、樺太地方のテタラペ（レタルペ）と呼ばれる白い着物もその一つです。

チキサニでは昨年10月末、森野地区にてエゾイラクサを採取しました。その後、茎を金づちで叩いて平らに割り、裏返しに折って中の肉を落として繊維を取り出す作業を行い、さらに繊維を白くするため、森野地区にて雪さらしにしました。雪さらしを終えると、次は繊維をひたすら糸にしていく、カエカという糸より作業が始まります。こうした気が遠くなるような手間と時間が必要とされる作業を経ることで、ようやくさまざまな生活用具の材料となる糸が生み出されるのです。今回、制作する糸は今後の体験交流事業にて活用する予定です。



左からエゾイラクサの
枯れ茎、繊維、糸玉

アイヌ総合政策課 アイヌ総合政策グループ 学芸員 森洋輔

問い合わせ先：イオル事務所 チキサニ ☎82-6301